ヤスパースの哲学思想 II
－包括者思想と哲学的論理－（承前）＊

伊 藤 明 房
愛知教育大学 昭和５０年卒

> 哲学的論理学は理性の自己意識ないし理性の機関と名づけられうる。実存開明が実存に属せしめられ、形式論理学が意識一般の悟性に属せしめられ、世界定位が世界に、形而上学が超越者に属せしめられるように、哲学的論理学は理性に属せしめられる。（『真理について』第一部 第二章 C i，245頁．傍点は引用者）

上記のように、実存を開明する思惟は実存的可能性を成就すること、内的行為としての思惟、すなわち、開明そのものである自由の意志表示である。(20) 同様に、哲学的論理学は理性を開明する思惟であるから、理性の意志表示といってよいであろう。ヤスパースが述べるように理性の自己意識である。

ところで、この二つの意志表示には相違がある。前者は、自由というのは実存の自由であるから、可能的実存の意志表示といえるのである。そして、後者において理性は「実存の意志」と考えられるものであったから、意志の意志表示という同語反復となるけれども思惟の源泉としての思念そのものを表していると考えられる。(21)ヤスパースは、「思惟とは限界のない空間である」と表現している。（同上）「思惟そのものがわれわれの内的態勢に対して圧倒的な力をもっている。私がそれはこうだと確信をもって思惟しており、あるいはその可能性に関する知をもって思惟している」のであり、思想というものが私たちにとって重要であると考えるのである。(22)

ヤスパースは、私たちは「特定の対象にせざるをえないという思惟の形式に、拘束されている」（90頁）と考える。ゆえに、包括者を思惟しようとすれば、包括者の諸様態（世界・意識一般・現存在・精神・実存・超越者）へと対象的に分離せざるをえないとするのである。私たちの思惟の形式とは、１項（包括者の諸様態）(1)において考察した「自己意識の根本構造」のことであろう。

したがって、理性は、自我意識〈私〉が思惟を貫徹すること、一切を解明しようとする意志による思惟であるといえるのである。これが「理性の衝動」であり、一なる真理への衝動であろう。自我意識〈私〉が、可能性へ目を向けている状態である。ヤスパースは、それを「理性の雰囲気」（243頁）と言い表す。「誠実さと正義をもって存在するところの一切のものへとおし入ってその一切を有効ならしめ、一切のものを弁解したり隠蔽したりせず、また、一切のものを一義性によって軽薄にすることがないところに広まっている」、としている。つまり、理性は、現存在における「理性的な態度」（244頁）としての雰囲気というものであり、「単なる理性として存在せず、可能的実存の行為として存在する」(23)と、考えるのである。

ヤスパースにおける哲学する思惟とは、内的行為として現実を探求することであった。「現実そのものの経験に成るところを目指す」思惟である。この内的行為としての思惟は、「私の本質のもっとも深い内面において行われるところの、思惟と存在を一つにする行動」と考えられている。(24)よって、内的行為というのは可能的実存の行為であって、一なる真理を求める理性は「可能的実存としての自我意識」であるといえるのである。なぜなら、彼が実存の＜歴史性＞を自覚することを「歴史的意識」と呼ぶ、自己自身を捉える意識のことであるから、一者に至ろうとする理性とは、内在から超越へと可能性へ向けている視点としての意識といってよいからである。

この点が、実存と理性が「両極のように向かい合っている」ということの意味であろう。存在可能としての実存、可能的実存としての自我意識・理性という両極である。

ヤスパースは、また「論理学的自己意識・理性」（『真理について』第一部 第一序文28頁）と考えているから、ここまでの議論によれば可能的実存としての自我意識は、論理学的自己意識ということになる。一切を解明しようとする（一なる真理を求める）思惟を行うのである。彼は、そのあり方を以下のように表す。

> 思惟の心理学的自己観察としての自己反省（それは心的体験という経験的現象に的中するもの）ではないし、また実存開明の自己反省（それは具体的内実に的中するもの）でもない。論理学的自己意識は、あらゆる様態の自己反省を利用しつつのりこえてゆく・・・・・・・、すなわち、私にとっての存在の諸様態と私自身の存在の諸様態との、すべてを貫徹し包括する明晰さである。（28-29頁）

可能的実存としての自我意識は、論理的明晰さの意識であり、「真理意識の明晰さ」（30頁）をもつのである。それゆえ、哲学的論理学は理性の機関（オルガノン）といえるものである。

> 哲学的論理学は、真理の意識を直接性から反省された知へと移す。・・・・・われわれの真理意識の現実がそれ自身に対してはじめて本来的に確実にされる。（16頁）

3　哲学的論理学における論理

「第一序文　哲学的論理学について・全著作への序文」において意義づけが行われる。（註(13) 16-27頁）

> 哲学的論理学は一切を包括する自己意識である。それは、前範疇的なものや超範疇的なものにおいて基礎づけてゆき、また伝達にあっては、範疇において思惟されて表現される一方、前範疇的なものや超範疇的なものに関係する。（17頁）：性格
>
> この論理学の意義は―具体的な諸決定は未決のままにしておいて―その決定そのものを、明るさを通じて、最高水準の真実性と自己意識性にまでもたらすことにあるのである。（22-23頁）

ヤスパースは、哲学的論理学の意義が明るさを通した「真実性」(25)と「自己意識性」にあるとしている。明るさとは、「たえず回復されてゆく論理的なものにおける共通の明晰さ」（24頁）であって「論理学は、前景にあるもののなかで逸脱することに対抗して諸根源を指示」し、「そこからみれば前景にあるものが透明になって、・・・・・非真理性が見透かされるような、諸根源への還帰を可能にするための条件を作り出すことを欲する」（27頁）とされる。

最高水準とは一切を包括するという意味と解すれば、哲学的論理学は「最大の抽象性を

もちつつも生に最も密着した思惟」で「空間を自由に」し、「すべての現実性と可能性の諸地平を見てとる」のである。それは「伝達可能性の空間であって、そこでは、思惟する人間たちが—その本質的な相違にもかかわらず—相互に出会うことができる」ものとして構想される。論理的明晰さが「有意義な、相互に-語り-うること、の前提」であり、「論理学的な熟慮の意義は、それが思惟しながらの交わりの機関となるということにある」のである。（20-24頁）

こうして、諸根源への還帰を可能にするための条件を作り出すのである。

自己意識については、「最初から、意識それ自身の意識という一つのあり方が、われわれの人生の一要素」として、「自己意識というもの、・・・また反省というものが、われわれ人間の思惟する現実存在の本質に属している」（19頁）とヤスパースは考える。前項までの考察によれば、「意識それ自身の意識」という「自己意識の根本構造」としての思惟の形式、筆者の表現では自我意識〈私〉という思惟する私のことである。

したがって、哲学的論理学は、一なる真理を求める(一切を包括する)思惟する私－可能的実存としての自我意識－における、真理意識の明晰さである。そして、「真理意識は存在意識と不可分である」とされるから、この可能的実存における存在意識とは、現実性と可能性を意識すること、思惟の内に存在が現前してくるような思惟を為すことである。

ヤスパースは、このような思惟を哲学的論理と言うのである。

「論理的な思惟にあっては、すべての存在の第一の諸根源が形式に従って意識される。」このことが、包括者思想を根本思想と呼ぶ意味である。(26) 包括者思想は「存在を現在化するその仕方を通じて、われわれ人間存在の深みにおいてわれわれを動かすような、思考の操作」なのである。「開明しながら描き出し区別づけてゆくという論理的作業」が真理意識の明晰さをもたらし、また「私が認識において内面的にいかに振舞うかというその仕方を、一緒に規定」する論理学である。（25頁）

よって、哲学的論理学をヤスパースは「思惟の倫理学である」とするのである。

(1) 哲学的根本操作

思考の操作である哲学的根本操作とは、「われわれがこの世界に存在しているありさまを包括者の諸様態をつうじて確認してゆくために思惟のなかでなされる過程」を名づけたものである。（註(6) 300頁）それは、「主客分裂の場面から、主体でも客体でもなくその両者を含みこんでいる包括者へと、思惟の転換を遂行する」ことによる。

では、思惟の転換はどのように為されるのか。

私たちが主体として成熟し、自立した個人となるということは、自己意思をもつことである。前述のように（註(22)）、ヤスパースは思想の重要性を説くが、思想を一般性の強い観念である(27)と捉えれば、思想をもつことは〈私〉の意思（観念）が本来的なものを志向していることの証である。自己を支えるものとして思想を求めるのである。彼は思想の形成過程を以下のように表す。

> まず、世界内の事物を見て経験して把握することに向かい、具体的な知の伝統を己れの内にとり入れる。・・・種々の目標が拡散しているために、・・・これら目標が有限であるために、・・・際限のない可知的なもののために、探し求めてゆく人間には不安が生じてくる。（第二序文　根源の思考への端緒・第一巻『真理について』への序文 81頁）

さらに進んで「知の内にある諸矛盾」や語り方（言い回し）に疑問をもち、本来的なものを求めるようになっていくのである。それは「万物の内なる一者であるところのもの、究極目標、もとの根拠、世界全体、神性」等と表される「一つの根本問題」（同上）であるとされる。根本問題というのは、「存在とは何か」（67頁）ということである。

しかし、ヤスパースが言うように、私たちは存在を知っており、それが真であるという自明性(28)のなかに生きている。私たちは、世界内の事物を経験して知るのである。認識作用は具体的思考を経て抽象的思考へと発達するが、抽象的思考は「だれにでもできるわけではない。かなり多くの人は、具体的操作の段階にとどまっている」(29)という現状があると思う。前項において、現実の根本状況と言われたことである。換言すれば、私たちは「意識的にその諸地平において把握された存在のそのつどの体系の形での世界閉鎖性」（85頁）であるところの観念－存在意識－をもって生きているのである。

このため、教育による知の伝統を学ぶことにより抽象的思考を発達させることが肝要であり、そうして知の矛盾を越えてより全体的な思想をもとうとするのである。抽象的思考は、「自分が見たことも聞いたこともないようなことについて、ただ論理だけを駆使して結論をだす」という形式的推理を行う（註(28) 118頁）ため合理性一辺倒になる危険を伴うが、私たちが複合的観念である思想をもつことは、「自明なものが疑問にされる」（67頁）ことにつながる。知の矛盾という思考過程の不確実さ－「偶然的なもの、不十分なもの、性急なもの」（77頁）－を感じるからである。

> われわれの存在の諸根源からして何ものかが語りかけており、それによってわれわれの通常の世界が当然のことながら動揺するに至るということを感じる。（めまい状態）数多くの懐疑の問いを発するなかで、・・・根拠となる端緒を求め、また、めまいをひき起こす思考の、飛躍のない意味を与えうる秩序を求める。わきに押しのけることではなくて、批判することがここでの課題である。（同上）

こうヤスパースは述べるが、合理性一辺倒で乗り切ろうとする立場では、不確実な知をわきに押しのけようとする。対して、批判的思考では飛躍のない思想を目指して、「因果的な意義連関を通じてその答えの真理が己れのものとされ誤謬が放棄される」（82頁）よう思考を進めるのである。彼は、「真理への道」（同上）と言う。真理への道は、本来的なものである「存在とは何か」を問うことにより始まり、根拠となる端緒を求めるのである。

このように、自明なことを解明することは通常の思惟の仕方ではない。なぜなら、解明しようとする〈私〉の意志は、私の深みからの「自ら明白になろうという無制約的な意志」（77頁）として自明性を問題とするからである。この思惟を遂行することが、哲学することなのである。そして、「私はどのようにして存在を思惟することができ、また思惟せねばならないか」（83頁）を包括者思想が示すのである。

a 包括者は存在そのもの

「包括者は、－対象的に現在しているものや諸地平のなかでは－つねにただ告知されるだけのもの」、「その地平をのりこえることによって、この包括者がただ間接的な仕方でだけ現前するものとなる。」よって、「すべての存在がその下で・・・本来的存在となるような条件」であり、「非閉鎖的であり続けるような存在の根拠としての全体」である。

したがって、私たちは「思惟しながら包括者をただ限界としてのみ覚知」することができるだけなのである。（87頁）

b 包括者の分節化－諸様態－

ヤスパースは、思惟により包括者が分節化されるとして四つの思考の歩みを示す。(30)

第一：われわれである包括者と存在それ自身である包括者への分裂

第二：われわれが現存在・意識一般・精神としてある包括者の区分

第三：内在者から超越者への分裂

第四：分裂しているものから統一へ

「われわれにとっての存在」はすべて、「存在自体」が意識一般に対して現れるがままの形態における「存在自体」の現象であり、世界が理念であるということ。私たちは、単なる意識ではなく現存在であり、精神として現実的であり、世界は私がそれである内在者と対象となる内在者－世界存在－を包括しているということ。内在者は人間を満足させることがなく世界から超越者へ、意識的精神の現存在から実存へ、超越してゆく飛躍をなすということ。包括者は多重的なあり方をしており、すべてとの関係のなかで経験して統一しようとする衝動が、すべてを結合したいと願う包括者として理性へと導くということである。（104-107頁）

分節化は、「一般的な包括者からある一つの内実の覚知に到達するや否や、・・・数個の諸根源を経験することになる、という根本経験から生じる」（108頁）とされる。「根拠づける限界を前進的に経験してゆくなかでのみ、存在の根本内実の多重性という形で、そのつど包括してゆく意識として開顕」（109頁）されるのである。

この根本経験(31)は、私たちが世界に存在しているあり方の（自己を見い出す）経験である。ザーナーは、「単純に受け容れられるうるものとして、それら経験は以下の的確な諸命題にまとめられうる」とする。（註(31) 同頁）《私は現存する》－《私は世界の中に存在する》－《私は認識する》－《私の精神は一つの世界を形成している》－《私は私自身に到達しうる》－《その場合、私はあたかも私に贈られたかのようである》。これらの命題は、1項(1)で考察した存在経験を表すものであって、われわれである包括者の諸様態は存在経験の深まりを指示しているといえる。

c 存在の図形の図式（289頁）

ヤスパースは、図式について「それらが真理に奉仕する限り、単なる一つのたわむれである」としつつ、「もっとも簡単な言語」という形象に固定することを試みる。それは、思惟が心理的に「身を支えるための直観性の仕組みが必要であるということ」による。

ここでは、存在経験の深まりということから整理してみる。（290-296頁）

第一、「世界存在が意識一般に対して対象となる」。「現存在と精神が世界存在として客観化されて現象する」。

第二、実存（本来的自己存在）は、「世界のなかで能動的に、現存在と意識と精神において己れを現象にもたらす」。

第三、実存は、意識一般の思弁（純粋な思惟）による形式的な超越するはたらきにおいて、「挫折してゆく思惟のなかで超越者を覚知する」。また、「すべての世界存在のなかで（現存在の生命性と精神の霊性と世界知）、可能的な暗号文字を瞑想的に読みとる」。

第四、存在意識に対して、「世界は超越者と実存との間で球のように浮動している」と表象される。これは「存在の根拠をめざして突破されざるをえないということ」であり、「可能的な理性という一切を包括するもの」を示唆している。

(2) 包括者存在論（Periechontologie）

こうした包括者を開明する教説を、ヤスパースは包括者存在論と名づける。（323-325頁）

「それは超越してゆく思惟のなかで間接に考え当てられるものを感得させる（非対象的な解明）」。包括者は「すべての限定された存在者に先立つものとして、・・・とり入れてゆくもの、意義を与えるものとして思惟される」。それは、「存在者の体系的方法」(32)で、私たちは「決して包括者を把握することがない」のである。思惟しながら照明するのみである。

包括者は「対象性の限界」において覚知されるもので、先立つものとして告知されるだけである。また、それは存在者をとり入れて存在者に意義を与えるものである。これは、ザーナーが言うように、「この限界が、そこで存在者が包括者を目差して透明化する場所」であり（註(15) 108頁）、諸様態には意義を与えるものという先行者と後続者の「位階秩序」を認めることができるということである。（註(5) 321-322頁）「低い段階は、それの達成に関して、一層高い段階の可能性の制約の下におかれるということ」、「高い段階はそれ自身だけで孤立化せられては実現されないで、むしろそれが限定し、突破し、同時に確保しなければならない一層低い段階を前提として実現されるべきである」ということ。

しかし、意識一般の様態が「優位をもっている」のである。というのも、「すべての他の様態がこの意識一般からの思惟によってはじめて明白になる」からである。ヤスパースは、「自己自身を思惟することのできる包括者のあり方である」とする。（95頁）そして、つぎのように述べる。

> 意識一般のこの媒介を論理的なものと呼ぶとすれば、包括者のすべての他の様態は前論理的なものであり、思惟に先立つものである。（96頁）

こう言われることは、哲学する思惟が、思惟と存在を一つにする行動といわれる内的行為であることを示しているといえる。意識一般が、思惟の内に存在が現前するような思考作用を為しているのである。

以上のように、ヤスパースにおける哲学的論理である包括者存在論には、諸様態の位階秩序である階層序列が認められる。われわれである包括者は、意識的精神の現存在という内在者として対象というあり方で世界存在という内在者を認識し、存在それ自身である包括者の世界の中に存在する。そこから本来的な自己である実存へと超越すること、つまり、内在者から超越者を目指しているのである。

意識的精神の現存在における認識作用、実存の現実化、精神の充実という実存の内実の構成、これらは主体が客観である世界に包括されるとともに、世界は主体に体験され意識され理念に形成されることにより包括されていることを表している。私たちは、このような全体性として存在しているというのが人間の根本現実である。

ゆえに、包括者存在論は、意識一般の論理的媒介により諸包括者を結びつけ、内在の包括者と超越の包括者を結合する可能的な理性による「真の認識作用」（95頁）といえるものである。それはまた、真理意識の明晰さという「存在意識の明白化」でもあり、「哲学する人間の根本気分（根本態度、根本態勢）」（92頁）であるいう。包括者の紐帯である理性が、可能的な無制約的な意志として、地盤である実存と超越者という一なる包括者を照明するのである。

前項での考察のように、理性の機関（オルガノン）としての論理学なのである。

(3)　包括者存在論と暗黙知理論

「暗黙知とは人間の人格的参加による知の全体のありかたに対する表現である」と栗本慎一郎は述べる。(33)　人格的参加による知の全体のありかたとは、分かりにくい表現であるが、「対象を設定すること自体の中に現われ出るとともにそれを包摂する人間の行為全体を指す」と言われると、対象を認識する意識一般の包括者との異同を思う。暗黙知は、知の全体の階層的構図で「統合」（integration）の行為を指す。（註(33) 20頁）彼は「層の理論」（The Theory of Levels or The Theory of Hierarchical Levels）と称する。（22頁）知の全体構図は、「下位のレベル（階層または層）にある具体的諸細目への注目から（from）上位の原理である包括的存在へと（to）注目を移すという形になっている」（21頁）という。

暗黙知とは「存在する」ことと同義で、四つの諸相に分類される動きにおいて「知る」ことと理解される。注目の仕方によって見える様相が違ってくるのである。知の構図は機能的（fanctional）、現象的（phenomenal）様相を示す。包括的全体への方向性に注目することから全体性へ従属的（subsidiary）関係が現われるということである。意味論的（semantic）様相とは、全体をはっきり持った具体的諸細目の位置づけができるようになることをいう。最後の存在論的（ontological）様相は、包括的全体を越えて広がっていくさらに大きな全体的なものを透視させるような、広がっている状態のことである。（28-29頁）

暗黙知は人間の行為全体を指す概念として、「自らの宇宙における存在論的位置を知ろうとすること」を目的に、意味形成の中で働く「制御している原理それ自体［制御原理］」のことをいうのである。（19-20頁）

暗黙知の階層的構図は、このように包括者存在論と類似性があるようであるが、詳細は改めて検討することとして、ここでは以下の点を指摘しておきたい。

両者とも「存在」について語ることであるが、栗本は西欧的思考形式を問題として「今、全く新たな言語体系が必要とされている」、マイケル・ポランニーの「暗黙知（tacit know-ing または tacit knowledge）の理論にその具体的な展望がある」と提起する。（12頁）一方ヤスパースは、「われわれが区別した包括者の諸様態は、その思考されたあり方では歴史的であり、われわれ西欧の形成過程の成果であって、われわれの先祖はこれらの諸様態の空間で生きかつ思惟してきた」（註(13) 255頁）と考える。そして、「包括者の思想は、・・・いかなる新たな対象を示すことがないのと同様に、いかなる新たな方法でもない」、諸方法の意義が充実され、それ自身を越えて進むよう鼓舞する自由な空間であるということを強調する。（92頁，註(26) 参照）

さて、哲学的論理学の構想(34)は、第一部が「限定された知がそこで実現されるような空間」である『包括者存在論』（前論理的なもの）、第二部が「方法によって手に入れられる知[確実さ]の限界を限定する」『方法論』、知がそこで存立しているカテゴリー『範疇論』、「体系的な諸形態という形」の知である『科学論』であるが、第二部は遺稿として公刊された。

第二部の主題は、第一部に包括者を覚知するための具体的実例として取り入れられ、包括者は第二部で限定されたものの意義と目標を制約する。現実に向かう諸科学は、根源からの衝動によって充実される。こうして、包括者存在論である哲学的根本知へと帰る循環をなしている。

ヤスパースの考える哲学的論理学(35)は、「論理的な超越するはたらき」により開明された包括者を諸科学の様態の中で再認識することを意図するのである。

結　語

ヤスパースが哲学の根本思想（哲学的根本知）と呼ぶ包括者思想は、「認識してゆく人間存在の開明」（註(13) 64頁）である。本論考では、人間がこの世に存在していることの根本経験である包括者の諸様態を、経験の諸相（存在経験）の深まりとして捉えようとした。

現存在は、生体験の意識で、衝動や欲求が感情表出となって現われる現実存在である。意識一般は、共通意識という主観性の枠組みとしての自我〈私〉の認知能力（言語による思惟可能性）である。思惟は具体的思考から抽象的思考へと発達する。精神は、想像力により形象を構成する全体的な力（観念的総体性）で、社会や文化を創り出す。現実存在として人間は、環境界で生活する社会的存在である。そこで自我意識〈私〉は、素質としての性格をもつ個別の存在者であることを自覚しているのである。こうした身体を抑制しなければならない「自己意識の根本構造」（形式としての制約）である、自我意識〈私〉による経験の自覚こそ存在経験といえるものであり、私たちの存在意識であると考える。

このように人間は、諸様態の多層的関係において現実存在なのである。意識一般は、対象として意識に現象させる。精神は内部表現としての観念であるから、思惟する自我意識〈私〉の意思といえるものである。この意思は、実存という本来的自己存在を思惟する。実存は能動的に現存在へと現象する「自由としての私」のことであるから、自由の自覚が実存の存在経験ということになる。実存的経験は超越者を感得させ、一者（超越者）と結びあわされている実存そのものである理性という包括者の紐帯がある。筆者は、私自身の思念が一者を目指すという、実存の意志であると解釈した。理性は一なる真理を問う。

A　理性の哲学的論理　－包括者存在論－

理性は、現存在においては可能的実存の行為としてあり、思惟する〈私〉としては「可能的実存としての自我意識」であると考えられる。それは、最大の抽象性をもちつつ生に密着した思惟の論理的明晰さの意識である。現実性と可能性の「自由な空間」を開く。

哲学的論理は、哲学的根本操作と名づけられた「存在を現前化する仕方」である論理的作業である。「明白になろうという無制約的な意志」である理性が、包括者へと思惟の転換を為さしめるのである。包括者はただ限界としてのみ覚知され、諸様態は「包括してゆく意識として開顕」されていく。１．世界存在が意識一般に対して対象となる。（認知）２．現存在と精神が世界存在として客観化されて現象する。（社会・文化）３．内在者の不満から超越的なものへの飛躍（理念・明白さへの無制約的な意志）４．可能的理性による諸包括者の統一（開放性と多次元性の空間）

諸様態は存在経験の深まりという点では、表にされた区分が基本となろう。（註(30)）

B　包括者思想の批評

ザラムンは、「その内容においてもはやまったく論議可能ではないし、この論議不可能ということによって、あらゆる批判的議論にたいしての免疫性を与えてきた、という危険を述べている」（ファイヤアーベント）と論述している。(36) また、沼田隆は、「そこにはやはり，「超越者」や「実存」に対する実体的理解があるのではないか。そして，この実体的理解から結果する孤立的実存の欠陥を補うものとして，「理性」が強調されるのではないか。」(37) こう宗教的信仰の視点から述べる。ザラムンは、合理的論証ができる合理的思惟の価値から言及するのである。宗教的信仰に対するヤスパースの哲学的信仰については、今後の検討課題である。

ともかく、包括者存在論の主題は、「いかにしてわれわれが包括者のなかでわれわれを見いだすかということ」である。（325頁）つまり、包括者存在論は、交わりの空間としての意義をもつものである。

註

＊ 前稿に続く論考である。『哲学と教育』63号，愛知教育大学哲学会，2015年，所収

(20) 前掲，拙稿「ヤスパースの哲学思想－実存の歴史性と交わり－」，3頁

(21) 林田新二『ヤスパースの実存哲学』，弘文堂，1971年，148頁
「理性としては、実存において基礎づけられた人間存在の全体化意欲そのものである」から、結局「実存と理性として、存在と交わり－内－存在 In-Kommunikation-Sein とは同一であり、人間は現実に彼自身である」（『真理』三七九）といわれている・・・・・」において、人間存在そのものの全体化意欲であるとされる。

(22) 前掲，『真理について 1』，68頁．「思想というものは、私が身を支えるものを与えることができるが、他面より多く私からなお奪いとることもありうる。・・・・・・思想はやはり、思考しないことのもつ確かさにあってはうつろな不満のなかで私に欠如しているところの本来的なものへと、それでもってのみ到達されうるような敢行である。」 第二序文 根源の思考への端緒・第一巻『真理について』への序文

(23) 前掲，『理性と実存』，306頁

(24) 草薙正夫訳『哲学入門』新潮文庫，1972年改版，162頁．『理性と実存』において実存開明が、「理解と理解されるものの存在とが一つになることである」と言われることである。302頁．『哲学』では、「意志自らその無制約性において意志し、それが自分の行為と一体であるとき、技術的操作と、この操作を行っている自分とを分離することはできない。根源としての内的行為は、このような不可分離性である。」草薙正夫・信太正三訳『実存開明〔哲学Ⅱ〕』創文社，1972年，366頁
同上，「内的行為が、可能なるものの空間における試みとして、外的行為への道の用意をするものであるのと同様に、無制約的な内的行為は、外的行動におけるすべての純粋な決意の根底である。」，無制約性については、「相対性を脱して根底への帰路を見出す決意であり、絶対的意識の明晰化であり、私が自己と対決しつつ一切を賭けてから得る実存である」と定義している。

(25) 鈴木三郎は、「それ〔真理-引用者〕は―真実であるということ〔真実性-以下同訳〕だけにより、内容からは独立に―ともかくそこに真理が存在する、ということで深く満足させることができる。」において、真理存在（真実であること）を「真実性」と訳している。前掲，『実存哲学』，54頁．この文脈では「wahrhaftigkeit」である。

(26) 「われわれがあらゆる限定された存在をこえ、なお見ることができそのために限定されているあらゆる地平をこえて、われわれがそこにありわれわれ自身がそれであるような包括者へと、思考を高めてゆくことによって、われわれは哲学的な根本思想を実現するのである。」，『真理について 1』，86-87頁．

(27) 「思想とは、次のような性質の観念（考え、思い）である。
1．単に一つの状況のついての観念ではない。いくつもの状況を通しての総括的観念である。多状況的（multi-situational）な観念である。( )内省略－以下同じ。

２．一つではなく、複数のカテゴリー（意味次元）を関係づける観念である。

３．右のような多状況性（広さ）と多次元性（複合性）の性質の観念は、その観念を持つ人間の行動に影響する。

４．広く複合的な観念であるがゆえに、異なる他者とのコミュニケーションが容易になり促進される。　以下省略。

宇佐美 寛『教育哲学』東信堂，2011年，68頁

(28)「存在は事実という意味での現実の存在でなければならず、知は、それが認識しつつ己れのものとして獲得して知自身に変えるところの対象に関係せねばならず、真理存在は言表の妥当性でなければならない」というもの。『真理について　１』，78頁通常、疑問にされることのない絶対的なことである。

(29) 波多野完治『子どもの認識と感情』岩波新書，1976年，188頁

(30)「包括者の諸様態は『理性』『実存』『真理』『啓示』等々の彼の後期の著作の主要なものでそのつど区分されているが、これらの区分にあって顕著なことは、この区分の仕方の多様性である。」前掲，『ヤスパースの実存哲学』，157頁．註(4)参照区分の多様性が示されているが、「区分の相違の理由を説明することは困難である」としている。ここ『真理』における分節は表にされている。107頁

(31)「人間は、何ものかにより、何ものかを通じ、何ものかに関し、驚き、疑い、当惑する。この何ものかをヤスパースは《根本経験》と呼ぶ。」「歴史的ないし伝記的に最初の経験とか、依然隠蔽されうる限界状況の極限的経験を考えているのではなく、どの人間も、自分が世界の中で自己自身を意識している限り不可避的に行っている基本的経験をかんがえているのである。」前掲，『ヤスパース』，105頁

(32)「この体系的方法には、それによってはじめて一者にまで到達するために本質的相違をもった諸根源へ至ろうとするとともに、最大の広さへ至ろうとする意志というものが、思想的に刻印せられている。」，『真理について　１』，341頁．この意志は、換言すれば「自ら明白になろうという無制約的な意志」である。また、訳注(30)を参照されたい。

(33)『意味と生命 暗黙知理論から生命の量子論へ』青土社，1989年，19-30頁．序章 第三節 暗黙知理論の展望，参照。序論的位置づけとされる。

(34)『真理について１』，60-66頁．第一序文　哲学的論理学について・全著作への序文 Ⅳ 哲学的論理学の構造と分節化，解説，462-465頁．参照。遺稿については、ミケル・デュフレンヌ／ポール・リクール，佐藤真理人訳『カール・ヤスパースと実存哲学』月曜社，2013年，一般的序論 第二章 根本操作－超越，［訳注9］参照

(35)「われわれの世代全体が新たな包括的論理学を作り出すのである。知の変革においてわれわれが人間存在の生成に関与するということは、不気味なことであると同時に感動的なことである。（略）この道程の途上にあって、私の論理学は、全体としての論理学の構想をあえてたてるような反省であることを欲するものである。」同上，59-60頁．

(36) 増渕幸男訳『カール・ヤスパース』開かれた地平の哲学 以文社，1993年，47頁

(37)『実存と宗教的経験』杉山書店，1987年，22頁